

新CL寓話一Ⅷ

2019

David K. Reynolds, Ph.D.

第1部

A Boy and His Cat

8. 少年とペットー子供の体験を見守る



昔、猫を飼っている小さな男の子がいました。猫は金網の籠で飼われていて、男の子が餌をやったり、猫をなでるときも、籠からペットを取り出したりしませんでした。

「猫は信用できない」、「いつ逃げ出すかわからない」と言っていて、友だちが「でも自分の猫は可愛いのでは？」と聞くと、

「特に…」と少年は答えました。「でもペットはぼくのもので、逃げないよ」。男の子のお母さんは、「猫に餌をやって、ふさふさした毛を撫でれば、猫はもっとあなたのそばに寄り付きたいでしょうに」と言いました。それでも少年は籠から取り出したりしませんでした。

お父さんは猫を可哀そうに思って、いつも閉じ込められているのはどんな感じか知るために、籠に男の子を入れるとおどしました。でも男の子はお父さんは口だけだと知っていました。

一月、一月と経ち、猫の落ち着かない状態は無気力に変わっていきました。動く様子は止まり、毎日食べなくなり、その動物は小さい籠のコーナーで体を丸めて横たわりました。

「猫はもうすぐ死んでしまいますよ」とお母さんが警告しました。

「猫を籠から出さない」とお父さんは命令しました。

「猫をぼくに出させようとするだけでしょ」と叫んで、癩癩を起しました。

ですから、猫は死ぬまで籠に置かれたのです。


「今なら取り出すのは気にならないよ」と少年は静かに言って、ぐるぐる籠を回して、堅くなったふさふさした毛の死体をゴミの中に捨てました。

「僕が準備できるまでは絶対取り出さなかったんだ」。

この物語は、殺してしまった自分の猫を一生懸命にコントロールしようとした少年の話です。時々親たちは子供たちが外に出て、自分の失敗から学ぶのを阻止して、子供たちを守ろうとします。人は生きて成長するなら、皆ある程度の自由を必要とします。

私たちは何かをととても愛し、それを失うことをたいへん恐れます。しかし、本当に何かを誰かを愛するなら、その人やそのものの自由を十分信頼しなくてはなりません。

(アメリカ・オレゴン州CLセンター所長)

 [目次へ戻る](#)